



営農情報

第42号 平成27年12月8日

「あまおう」12月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

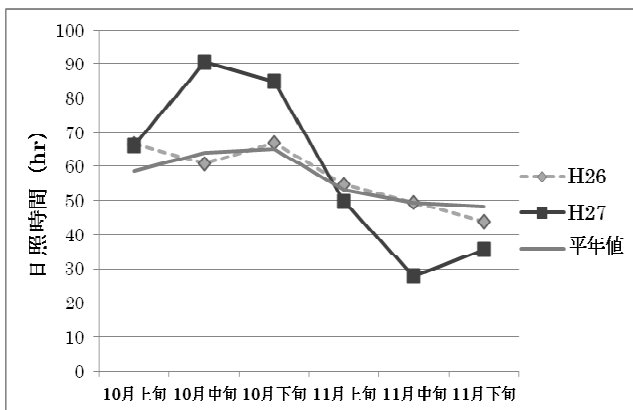
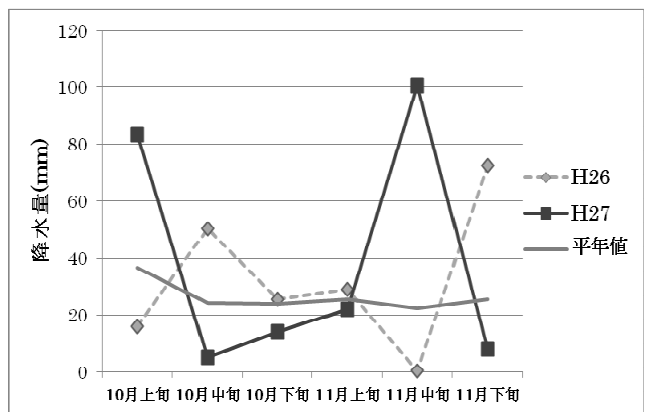
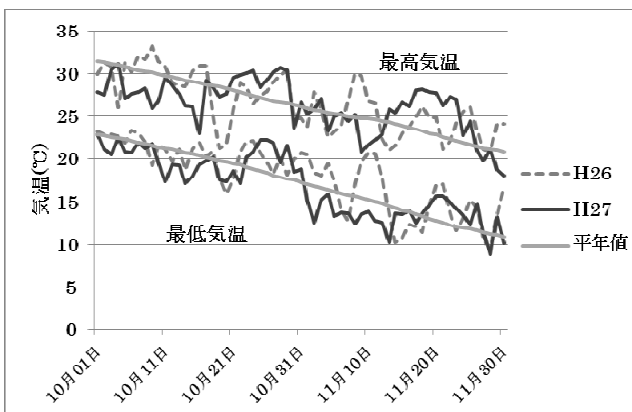
10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

【はじめに】

定植後の低温と乾燥で生育は遅れていたが、11月から高温で経過したため、全体的に生育は前進化しており、成熟日数が短くて収穫時期になっているため小玉傾向です。早期作型では収穫中盤から終盤、普通作型で収穫開始となっています。

病気害については、軟弱徒長のためうどんこ病の発生が見られるようになりました。また、葉露が多く温度、湿度も高い状況が続いているため灰色かび病の発生が多く、果実への被害も多く見られています。

害虫については10月中旬からの乾燥でハダニ類、ヨトウムシ類の発生が多く、現在でも見られています。



<アメダス久留米データ>

昨年は、1番果房、2番果房、3番果房と果房間葉数が少なく連続した収穫となり、摘果も不十分だったため、春先以降成り疲れで出荷量が激減した。

1番果房と2番果房が連続して上がってきているほ場(果房間葉数が4枚以下)については、春先以降成り疲れを防ぐ管理に心がけて下さい。

【果房が連続した場合の管理】

①強めの摘果により、着果負担を軽減する

○1～2番果房間葉数が4枚以下である場合は、1番果房の着果数を1果梗当たり3果以下とする。



○小果は、不受精による奇形果になりやすいので、摘果する。

○1番果房の収穫が終了したら、すみやかに果梗を除去する。

○2番果房出蕾以降の芽数は4芽までとし、「どろ芽やわき芽」の除去を徹底する

○早進株は株疲れしやすいため、1番と2番果房を合わせて10～12果/株に摘果する。

②積極的な保温で、展葉速度を速める

○着果負担が増大し、展葉速度が遅くなったときには、早めのハウスの閉め込みや、午前中の遅めの換気によって温度を確保する。ただし、うどんこ病の発生が見られる場合は、やや低目の温度管理を行う。

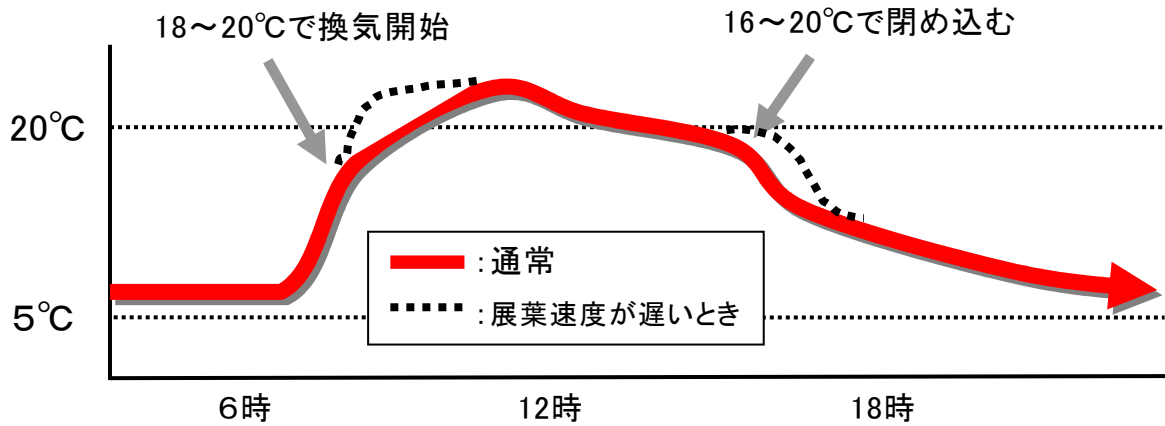
○サイドの内側や谷には内ビニルを張り、冷気が直接吹き込まないようにする。

○ハウス内の温度ムラは暖房効率を低下させるので、ハウスの両サイド・中心部・暖房機から遠い所等、数か所に温度計を設置して、温度ムラがないかを確認し、温度が均一になるようダクトを配置する。

【 温度管理の目安 】

生育ステージ	昼間	夜間	備考
1番果房収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの温度管理 12月中旬以降はやや高めに変更
1番果房収穫終了後 2番果房出蕾～肥大期	24～28℃	5～7℃	2番果房の生育促進と、3番果の早期出蕾を 目的として高めの管理

1日の温度管理模式図



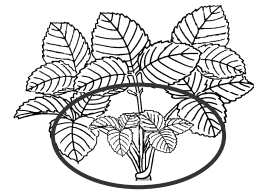
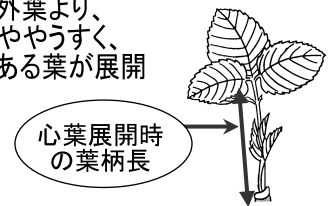
【電照管理】

心葉の展開位置を確認して、電照時間を調節する

- 電照の効果は1週間～10日後に現れるため、わい化してから電照時間を延長しても遅いため心葉の展開位置が、外葉より低くなり始めたら、電照時間を延長する。
- 電照時間は、2時間～6時間の範囲で調節する。
- 夜温が高いと、電照効果は高くなる。
- 厳寒期は立ち上がりすぎているようでも、電照を完全に切らないようにする。

【心葉展開時の葉柄長の測定】

心葉は外葉より、葉色がややうすく、つやのある葉が展開



わい化状態の心葉

【電照時間の調整の目安となる葉柄の長さ】

電照時間	時間を延ばす	現状維持	時間を短くする
心葉の葉柄長	9cm以下	9～11cm	11cm以上

<3、4番花芽分化時期>

【早期作型】 3番果房:11月下旬～12月上旬 4番果房:12月下旬～1月上旬

【普通作型】 3番果房:12月上旬 4番果房:1月中旬

※花芽分化期に電照時間を延ばすと、花芽が遅れる可能性があるため注意する。

その他の管理

- かん水は少量多回数で行い、高温管理をする場合はかん水量を増やす。また、暖房機の稼働で、乾燥しやすくなるので注意する。
- 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- 2番果房出蕾期や、草勢が弱く株のわい化が予想される場合は、ジベレリンの散布を行う。
- 成り疲れを軽減する為に、発根促進剤(チャンス液、パフォームソイルなど)を定期的に流す。

病害虫防除

○灰色かび病・菌核病

- 湿度が高いと発生しやすいため、できるだけ換気を行う。
- 曇雨天日などは、暖房機の送風や循環扇を活用する。

○うどんこ病

- 病原菌は乾燥条件で蔓延するが、胞子の発芽には高湿度が必要なため、ハウス内が多湿にならないように換気を行う。
- 軟弱徒長した株に発生しやすいので、多発したほ場ではやや低目の温度管理を行う。

※ 灰色かび病、うどんこ病は、発病部位を速やかにハウス外に持ち出す。
また、定期的な薬剤散布(1週間間隔)による予防に努める。

○ハダニ類

- 春先の急増を予防するため、ハダニ類の活動が衰える12月に防除を徹底する。
- ハウス内の乾燥しやすい場所や出入口など、毎年発生しやすい場所を特に注意して観察する。
- 寄生した葉の除去はすみやかに行き、ほ場内や周辺に放置しない。

<天敵を利用している場合の注意点>

- ハダニ類は春の気温の上昇とともに爆発的に増加するため、1月中旬～2月中旬にチリカブリダニを放飼する。
(チリカブリダニ 2,000頭/100mlボトルを2～3本/10a放飼する)
- ハダニ類の密度が高くなってからの放飼は効果が期待できない。また、1月～2月はハダニ類が活動を開始し、天敵よりハダニ類が多くなるため、必ず天敵に影響が少ない殺ダニ剤を散布後、チリカブリダニを放飼する。
- 天敵放飼後でもハダニ類が増加傾向にあれば、早めに天敵に影響が少ない殺ダニ剤を散布する。
- 天敵が届いたらできるだけ当日に放飼し、当日放飼できない場合は冷暗所で保管し、翌日早めに放飼する。

親株管理

専用親株を雨よけハウスに入れている場合は、休眠を覚ますためハウスサイドを開放し、十分に低温に当てる。

秋ランナーを使う場合は、年内までに雨よけのプランターなどに定植する。

親株定植前に冷蔵処理(秋ランナーをポットに鉢受けし、切り離し後コンテナに入れて5℃以下の低温に20日間程度遭わせる)を行うことで、春先のランナーの発生が良くなる。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!